

福島を訪ねて

昨年、ボランティア仲間十名で福島を訪ねた。皆、六十歳以上で平均年齢は七十歳少し前だ。忘れ物はするしトイレは近い。出発の日、会長が待ち時間過ぎて来ない。乗船開始間際に来た。トイレが原因だと云う。歳だなど内心想った。我々は慌ただしくフェリーに乗った。暫くして私は帽子を待合室に忘れたことに気が付いた。だが既に出航した後だった。翌朝、今度はTさんがウロウロしている。車の鍵が無いと血相を変えていた。暫くして落ち着いた。見つかったのだ。そんな塩梅で旅は始まった。

この仲間は、札幌市の社会福祉協議

北の大地

会主催の東日本大震災ボランティアツアーに端を発している。社協の事業終了後、有志によりツアーを企画して今回は二度目である。被災地域分担の関係で札幌社協のツアーに福島は入つておらず、やはり福島にもとの思いが今回ののはこびとなった。行くに際しては色々議論をするも、話せば話す程何も分かっていないことを知る。結局、若者や女性は外すことにした。

仙台港で下船、レンタカーで海岸沿いに南下した。海岸沿いにクレーン等の重機が随所に見える。しかし、途中から景色が何処か不自然なことに気が付く。訪れたのは六月中である。田畑

に何も作付されていないのだ。宿に荷物を下ろし、地元の青年に南相馬市の小高地区から南側(原染から十二キロ地点位迄)を案内して貰う。そこは小高い丘の上だった。振り返って見下ろした道路の右側が太平洋で、道路に沿って復旧された電柱が一条の列を成すも、そこに在つたはずの集落は無く、道路の向かいに瓦礫が山積みされていた。一方、丘の上には津波を免れた農家が散在する。この一帯は日中の帰還は許されているが人影は無く、パトロールカーが巡回していた。道路の彼方此方が線量制限で進入禁止になっている。翌日、小高地区で農家の庭の抜根や除草をした。三年以上経過した庭は荒れ放題である。高齢の当主は早朝福島市内の借上げ住宅から来たという。その後、我々は飯館村に向かった。想定外の被災を受けた村である。原発の何の恩恵も受けなかつた村がである。全村避難で村はパニックとなった。その役場の建物は皮肉過ぎる程、堅牢で立派な石造りの庁舎だ。村内は国の

被災地雇用対策により村民のパトロール隊が巡回していた。村全体が阿武隈山地の中なのだ。田畑や庭では除染作業が行われていたが、表土を剥いだ水田は皮を剥がれた白鬼のように痛々しく思えた。黒のフレコンバッグがそこかしこに集積されている。仮置きや、更なる仮置きに山積みされている。除染作業がイタチこつこであることは素人目にも分かる。だが現状はこれ位しか術がない。事故以前から放牧されていたポニーが今も放牧されている所があった。不自然な死が相次いでいると聞く。感染症なのか放射能の影響なのか分からないが、関係なくはない気がした。放射能計測器が処々にある。数値は札幌と一桁は違う。何より何百年も人々の営みを支えた田畑がその体を成していない現実。延々と続くその様は異様だ。

我々は駆け足で断片を見たに過ぎない。每晚仲間達と語り合った。たかだか十人でも色んな意見の人がいる。「凄く景色ですなぁ」唯一合致し、皆溜息

を吐いたのだつた。

私は思う。福島原発被災地にはより多くの人に訪れて貰いたい。原発に反対でも賛成でも構わない。まずは現場を見た上で考え議論をして貰いたい。原発は安全だということ信じようと信じまいと、そのリスク管理は稼働の是非以前の話である。まずは現実的に目を向けて欲しい。何も難しい話ではない。賛成の方だつて自分の所に汚染土を「どうぞ」とは言えまい。反対の方も在る現実に如何対処すべきか分からない。だからと言つて先送りや済ませようとするのは、行先の無い使用済み燃料棒と同じではないだろうか。

更に私は思う。賛成の方には被災地の重さを良く認識して貰いたい。経済成長に絶対必要であるなら一体誰の為に必要なのか。都会の人は先祖伝来の土地への拘りの意味することを、どれ程理解しているのだろうか。もし国を慈しむなら善き形で明日へ繋ぐのが理だろう。帰還困難地域では、其処にある伝統も文化も消滅する重さを知つて

貰いたい。反対の方にも一歩踏み込んで考えて貰いたい。既に在るという認識の上で反対であつて欲しい。その後始末を如何するか、具体策を共に考えて欲しい。その一方で英知ある人達には、始末する術を開発して貰わなければならない。多様な分野の知恵を結集したら何とかならないのだろうか。もしなければ一体如何したらいいのだろうか……。帰りのフェリーの中で取り留めもなく考えていたら、置き忘れた帽子のことをふと思い出した。また、忘れるところだった。下船して、急ぎカウンターに走り帽子を受け取りしつかり被つた。

今年も福島を訪ねる。私達の時代に起きたこと、起こしたことを確認するために。